

地震津波を乗り越えた知恵と祈り

房総半島の沖合には2つのプレートが沈み込み、日本一隆起しているといわれる安房では、海岸段丘や断層が多く見られる。内陸部には海食洞窟や縄文サンゴ地層、「200万年前の海底地すべり地層」があり、大山千枚田は地すべり地帯を工夫して棚田である。

住宅街の路地に残るサイカチの古木は、元禄地震でよじ登った人が津波から助かったと伝えられ、葉が食用、実が洗剤、トゲが解毒剤にもなるという。

館山は、関東大震災で99%壊滅した。近代彫刻の祖・長沼守敬（ながめまもりよし）は、亡くなった知人を供養するためにレリーフを作っている。

地震や津波のたびに困難を乗り越えた知恵や教訓が語り継がれ、コミュニティの絆は信仰や祭礼の形となって今に伝えられている。



震災供養レリーフ／長沼守敬作



サイカチの木



200万年前の海底地すべり地層



海岸段丘

信仰の聖地



館山湾から見る富士山の夕景

古代の人びとが住んでいた海食洞窟から、祭祀に用いた土器などが見つかった。海洋民たちが崇拝した安房大神を祀った聖地が、のちに安房神社になったという説もある。大寺山洞窟遺跡からは、5～6世紀の舟形木棺に納められた人骨とともに、鉄の甲冑や武器などが出土している。海洋民のリーダーの墓であると考えられ、北欧のバイキングのような「舟葬墓」として日本で初めて確認された貴重な遺跡である。



洞窟遺跡ジオラマ（館山市立博物館）



安房神社

海の向こうの西方浄土に霊峰富士を仰ぐ信仰の地として、古くから多くの巡礼者が訪れている。千葉県内最古の磨崖仏をもつ崖観音（大福寺）、坂東三十三ヶ所巡礼の結願所である補陀落山那古寺など、多くの寺社仏閣がある。鶴谷八幡宮の祭礼は「やわたんまち」と呼ばれ、豊饒の恵みに感謝と祈りを捧げる伝統が今も脈々と続いている。



崖観音（大福寺）



やわたんまち（八幡祭礼）の御船